莎草研究 No. 20: 49−52 (2018).
J. Jpn. Cyperol. (20): 49−52 (2018).

【短報】

27 年ぶりに再確認された富山県のナガボノコジュズスゲ

正木智美[1]・Jenna E. DOREY[2]・太田道人[3]・石須秀知[4]
([1]岡山理科大学, [2]ニューヨーク植物園, [3]富山市科学博物館, [4]魚津埋没林博物館)

Tomomi MASAKI[1], Jenna E. DOREY[2], Michihito OHTA[3], and Hidetomo ISHIZU[4]: Reconfirmation of *Carex vaniotii* (Cyperaceae) in Toyama Prefecture, Japan, after 27 years

([1]Okayama University of Science, 1-1, Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, JAPAN; [2]New York Botanical Garden, 2900 Southern Blvd, Bronx, NY 10458, U.S.A.; [3]Toyama Science Museum, 1-8-31, Nishinakano-machi, Toyama-shi, Toyama 939-8084, JAPAN; [4]Uozu Buried Forest Museum, 814, Shakadou, Uozu-shi, Toyama 937-0067, JAPAN)

要旨
2016 年 8 月にナガボノコジュズスゲ *Carex vaniotii* H. Lév. を富山県黒部市僧ヶ岳で 27 年ぶりに再確認した。今回発見した僧ヶ岳のナガボノコジュズスゲは、標高 1280 m 付近の登山道脇に生育していた。

キーワード
スゲ属植物、富山県、ナガボノコジュズスゲ

ナガボノコジュズスゲ (*Carex vaniotii* H. Lév.) は、1902 年に A. A. H. Léveillé により岩手県をタイプロカリティとして記載された種（Léveillé 1902）で、本州（中部地方以北）に分布する日本固有種である（星野・正木 2011, 勝山 2015)。近縁種のグレーンスゲ (*C. parciflora* Boott) とは、葉の幅（ナガボノコジュズスゲ: 2−5 mm、グレーンスゲ: 5−12 mm）と有花茎の高さ（ナガボノコジュズスゲ: 15−40 cm、グレーンスゲ: 40−80 cm）が区別点となる（星野・正木 2011）が、中間的な形質を持つ場合、分類に迷うことがある。

富山県におけるナガボノコジュズスゲの分布は、富山市科学博物館 (TOYA) によると、下新川郡朝日町（イブリ山、鉢ヶ岳、雪倉避難小屋、赤男山)、黒部市宇奈月町（僧ヶ岳、清水岳、不帰岳）が知られている（図 1)。これらの標本のうち、最も古い標本は、不帰岳（1948 年 8 月 12 日)、最も新しい標本は、イブリ山（1989 年 8 月 1 日）であった。採集日は、5 月 16 日～8 月 12 日の 3 ヶ月間にまたがり、標高は、記録がある標本だけで 800～2500 m の開きがあった。

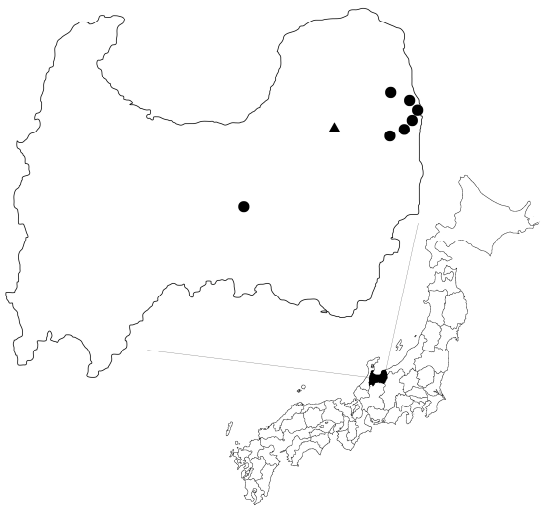

図 1. これまで知られている富山県のナガボノコジュズスゲの分布. ▲は僧ヶ岳を示す.これらの標本は、富山市科学博物館に収蔵されている.

図 2. 僧ヶ岳のナガボノコジュズスゲ. A. 小路登一氏の標本（1979 年 7 月 15 日、TOYA-100872）, B. 長井真隆氏の標本（1955 年 8 月 2 日、TOYA-12077）. スケール: 横線 5 cm、縦線 1 cm.

今回は著者の一人、Jenna E. Dorey が、タマツリスゲ節を含む近縁節の系統関係を研究しており、来日した 6 月 21 日以降でも採取できる日本産のタマツリスゲ節の種を探していた。著者の太田と石須は、標本調査により、8 月でも黒部市僧ヶ岳（そうがだけ）でナガボノコジュズスゲが見つかる可能性を見出した。そこで我々は、2016 年 8 月 1 日、僧ヶ岳におけるナガボノコジュズスゲの生育状況について調査をおこなうことにした。

僧ヶ岳は、立山連峰北端の山で黒部市と魚津市にまたがり、標高は 1855 m、山域の大部分が僧ヶ岳県立自然公園に含まれる。登山道は、黒部市側の宇奈月尾根ルート、烏帽子尾根ルート、魚津市側の東又ルートなど複数ある。今回はこのうち古くからメインルートとして登られ、過去のナガボノコジュズスゲ採集地点を含むと推定される宇奈月尾根ルートで調査を行った。僧ヶ岳のナガボノコジュズスゲは、長井真隆氏が 1955 年 8 月 2 日（標高 1000 m, 1400 m）、1959 年 8 月 1 日（標高 800 m）、および 1978 年 6 月 2 日（標高 1200 m）に、小路登一氏が 1979 年 7 月 15 日（標高 1200 m）にそれぞれ採取している。これら僧ヶ岳で採取された標本は、7 月に採取された標本の果胞が最も熟している一方、8 月に採取された標本の雄小穂には葯が残っていた（図 2）。当日（2016 年 8 月 1 日）、遭難碑広場（標高 1043 m）に駐車し、調査を開始した。登山道は、草刈りや階段、ロープなどの整備がきちんとなされていた。ナガボノコジュズスゲが刈られている心配もあったが、標高 1280 m 付近で Dorey が登山道の谷側の日当たりの良い場所にナガボノコジュズスゲを 1 株発見した（図 3）。この株は直径 10 cm ほどで、上部の雌花穂の果胞は落ちていたが、下部の雌花穂には未熟な果胞が残っていた。この株の一部で標本を作成し、各部位の計測をおこなっ

図 3. 僧ヶ岳のナガボノコジュズスゲ（2016 年 8 月 1 日撮影）. A. 生育状況. B. 雌花穂.

た結果、葉の幅 (2–4.5 mm)、有花茎の高さ (40–56 cm)、果胞の長さ (4.6–4.8 mm) であった。本種は、有花茎の高さが通常のものより高いものの、葉の幅からナガボノコジュズスゲと考えられた。当日はこの 1 株以外、ナガボノコジュズスゲを見つけることはできなかった。

その後、1330 m 付近の登山道の中央部、雨水で増水した際にできる溝の縁に生育しているグレーンスゲを発見した。採集した個体は、葉の幅は 4–6 mm、有花茎の高さは 32–52 cm、果胞の長さは 4.5–5.2 mm であり、果胞が開出しているのが見られた。有花茎の高さは低かったものの、その他の特徴からグレーンスゲと判断した。その後、標高 1400 m 付近の小池まで調査を進めたものの、ナガボノコジュズスゲもグレーンスゲも見あたらなかった。

今回、ナガボノコジュズスゲを標高 1280 m 付近で発見したが、完熟した果胞は得られなかった。また、これまで発見例が少ないのは、通常のスゲのシーズンよりも果期が 1–2 ヶ月程度遅いために見落とされていたと思われる。一方で、山腹の植生遷移が進行していることに伴い、登山道の日当たりが徐々に悪くなってきており、50 年前に比べ、ナガボノコジュズスゲの生育に適した環境が減少している可能性もある。今後は、調査範囲を広げるとともに、果期にあわせて調査を進めていく必要がある。

＜参考標本＞ **ナガボノコジュズスゲ *Carex vaniotii* H. Lév.**

富山県. 黒部市宇奈月町 僧ヶ岳 ([redacted]), 1283 m (正木智美・Jenna E. Dorey・太田道人・石須秀知 s.n., 1 Aug. 2016, OKAY-24907, TOYA-106567). 同 (長井真隆 s.n., 1 Aug. 1959, TOYA-12067). 同 (長井真隆 s.n., 2 Aug. 1955, TOYA-12077 & 12079). 同 (小路登一 s.n., 15 July 1979, TOYA-100872). 清水岳 (大田弘 s.n., 12 Aug. 1951, TOYA-36283). 同 (大田弘 s.n., 3 Aug. 1952, TOYA-36713). 不帰岳 (大田弘 s.n., 12 Aug. 1948, TOYA-48600). 下新川郡朝日町 イブリ山 (長井真隆 s.n., 1 Aug. 1979, TOYA-15705). 同 (太田道人 s.n., 1 Aug. 1989, TOYA-21795). 赤男山 (大田弘 s.n., 2 Aug. 1962, TOYA-41899). 雪倉避難小屋 (大田弘 s.n., 22 July 1976, TOYA-49849). 鉢ヶ岳 (大田弘 s.n., 2 Aug. 1962,

TOYA-48194）.

参考文献

星野卓二・正木智美（著）・西本眞理子（画）2011. 日本カヤツリグサ科植物図譜. 778 pp. 平凡社, 東京.

勝山輝男 2015. 日本のスゲ 増補改訂. 391 pp. 文一総合出版, 東京.

Léveillé, A. A. H. 1902. Les *Carex* du Japon. Bull. Acad. Int. Géogr. Bot. **11**: 108. Extrait du Bulletin de l'Academie Internationale de Geographie Botanique (Mars 1901).